

特集 守りたいもの

銅掛にある「イトヨの里」。
イトヨは環境省レッドリスト2007で「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定されている淡水魚。この川はきれいな水草が繁茂し、透明度が高い。

豊かな自然に恵まれた那須塩原。
その自然によって生まれ、人と共存してきたホタル。
長い幼虫期を経て、ようやく成虫になるもわずか2週間の命。
その儚さがゆえ人の心に染み入り、心を洗ってくれるのだろうか。
生活の便利さの一方で失われつつある地域の自然資源がある。
これからの子どもたちのためにずっとずっと守っていききたい――

自然と共存していくためには 自然に興味を持ち、生態を知ることが第一歩

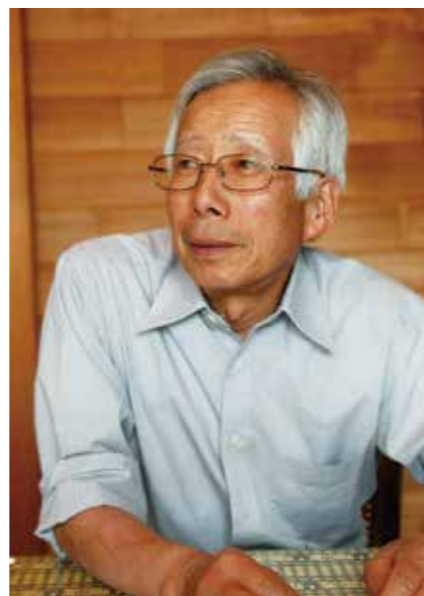
移住したくなるほどの **豊かな自然**
皆さんは自宅の周りにどんな生き物が住んでいるかご存知でしょうか。栃木は国立公園や農村部の原風景である里山など、豊かな自然環境に恵まれている県。中でも国立公園を有する那須塩原は、多種多様な動植物が生息・生育しています。つくば市で退職を迎えた私がこの地に戻ったのも、この自然の素晴らしさに感銘を受けたから。
「実体験」による発見が 感性を養う
現代はインターネットやテレビなどで簡単に知識を得ることができますが、「モノ」と直接向き合う体験が不足しがちです。自然に触れることも「実体験」の一環。教育的意義も大きいものと考えています。だからこそ、身近な自然をそのままの形で次代へ引き継いでいくことが必要なのです。しかし、現実には、人間の開発行為とともに

に自然環境は変化を迫られ、生態系に多大な影響が生じています。特に環境変化に弱い希少種の絶滅が危惧され、保護が必要な状況にある種も少なくありません。
壊すのは簡単 まず「知る」ことから
自然環境は人間社会という信頼関係のようなもの。壊すのはとても簡単ですが、修復するのは非常に困難です。
これからの時期は、初夏の風物詩ともいえるホタルが舞う季節。ホタルは長年、人と共存してきましたが、環境変化に弱く、全国的に減少が懸念されています。その原因は、人間の生活要因による場合がほとんど。「あの幻想的な光をこれからの子どもたちに残してあげたい」そう思いませんか。そのための第一歩が、まずは「知る」こと。ホタルのこと、自然のこと、環境保護のことを一緒に考えてみませんか。



市では野生動植物の生息・生育状況を調査し、絶滅のおそれのある希少野生動植物種についてまとめたレッドデータブックを今年度中に発刊予定。

市動植物調査研究会
会長 **松村 雄 氏**



長年の功績に栄誉

～叙勲・褒章受章～

このほど叙勲・褒章が発表され、本市から8人の皆さんが受章されました。
ここで、受章された3人(5人は掲載を辞退)の経歴とコメントを紹介します。

危険業務従事者叙勲

「地域の役に立ちたい」 変わらぬ思い



瑞宝 双光章 消防功労 69歳

後藤 浩之 氏

昭和42年、黒磯町消防本部に奉職。平成20年に黒磯那須消防本部次長で退職。現在は、自治会長をはじめ、生きがいサロンでのボランティア活動など、地域に根差した活動を積極的に行っている。

「地域の役に立ちたい」この一心で消防士となった後藤さん。退職するまで多くの現場を体験し、阪神淡路大震災では、いち早く志願して現地へ赴き、救助活動に従事しました。
また、那須水害や大工場の火災でも現場指揮を執り、「その時は、決断を下す難しさを痛感した。住民の被害を最小限にすることしか考えなかった」と当時を振り返ります。
「地域の役に立ちたいという思いは今も変わらない。高齢者の生きがいサロンでは、毎回参加者から元気をもらっています。今後も地域に尽くしていきたい」と話してくれました。

「1日でも早い社会復帰へ」 導く強い気持ち



瑞宝 単光章 矯正業務 66歳

森 三千雄 氏

昭和45年11月旧宇都宮刑務所に拜命。昭和46年3月に黒羽刑務所へ転勤。平成22年3月に退職するまでの39年間現場で受刑者と向き合い続け、更生と社会復帰に全力を注いだ。

「職務に必要なのは、強い気持ちと公平性。また、相手は犯罪者であっても人。『更生』と『人権への配慮』との観点が葛藤があった」と森さんは話します。受刑者に怖さを感じる瞬間もあり、「何度も辞めようと思ったが、それでも39年間職務を全うできたのは、同僚や先輩、そして何よりも家族の支えのおかげです」と感謝の思いを語ってくれました。
「まさか受章するとは思っていなかったので驚きましたが、自分のしてきたことを認めてもらえたのは本当にありがたいこと」と、感慨深そうに話しました。

「安心安全な地域づくり」 に貢献したい



藍綬 褒章 保護司 75歳

田代 稔 氏

平成3年から保護司の活動を始め、平成23年には、那須保護区保護司会長へ就任。現在も同会顧問を務めるなど、25年間、犯罪や非行をした人の更生をとおり、安心安全な地域づくりに尽力している。

「今回の受章は、同じく保護司として活動してきた仲間をはじめ、皆さんの協力があってから。自分だけでなく、みんなでもらった章だと考えています」と話す田代さん。
多いときは同時に6人を担当し、無事に社会復帰が出来るよう親身に相談を受けました。
「何度も面会し、相談に乗った人が無事仕事につけて、真面目に働いている姿を見ることができた時、とてもやりがいを感じます」。そう話す田代さんは、その場面を思い出ししているようで、少し遠くを見つめる視線は、とても温かなものでした。

春の褒章